

お伽訓話

不思議の裁判

あづま

さてもひかしく、まづある處に善右衛門に欲兵衛といふ二人の大金持が居りましたとさ。二人とも、何千萬圓とも數へ切れない程のお金を持つて居るのですが、善右衛門の方は、大層心掛のよい人で、他人が難義でもして居るといふと、自分の事の様に世話をしたり、助けてやつたりしますので、世間からは、佛の善右衛門様佛の善右衛門様といはれて、丸で神様か佛様の様にありがたがられて居りました。夫に片一方の欲兵衛はどうかと申しました、全く其名の通り、身體中慾の塊りかとも思はれる位、慾ばりで、慾ばりで、他人の事といへば自分の家の塵一本でも出してやる事は大嫌、おまけに意地の悪いことも、この上な

四十二  
 して、他人に迷惑のかゝるのは、どの位でも構はない、なるべく自分の損の行かない様に行かない様にし心掛けて居ります。夫で、世間では、鬼の慾兵衛、鬼の慾兵衛といつて、誰も彼も悪んで居ります。

所が或時のと、善右衛門のお友達の誠助といふのが、これも大した大金持でしたが、商賣で大損をして、其上何かの裁判で負けたといふので、大層な借金が出来て、よほど困つて、善右衛門の所へ相談に來りました。他人の事を自分の事の様に心配する善右衛門のことですから、夫を聞いて、「や、それはどうも御氣の毒なことだ、何、宜しい、私が一つ骨を折つて見ませう。」といふので、家にある金を悉皆出して仕舞つて誠助の難義を助けてやりました。善右衛門は、悉皆家のお金を出して仕舞つても幸ひ、自分の船が、今少しすると、大層な荷物を積んで這入つてくるといふので、安心して居たので

すが、運の悪い時といッたら、仕様のないもので、丁度其船が河口まで来てから大風で以て難船をして、荷物から何から、悉皆流されて仕舞つたのです。

さあ、こうなつては善右衛門も仕様がな、今までの大金持は、丸で一文なしの貧乏人になつてしまひました。

そこで、善右衛門は、何でもこの大損をとり返さねばならぬといふので、難船したのと同じ様な船を、も一艘造ることになりましたが、さて困つた事には、其お金がない、いろ／＼工夫して見ても無いものはとんとないので、仕方なしに、慾兵衛に借りて来ようと思つて、慾兵衛の家へ尋ねて参りました。

さて、慾兵衛に遭つて、だん／＼話をしました所が、一體慾兵衛は、平生から、善右衛門が、世間で評判のよいのを大層嫉んで居つた所ですから、この話を聞いて、心の中では、「それ見ろ、いゝ氣

味だ」と思つて嘲笑つて居りましたが、態と、氣の毒相な顔をして見せて、

「へ、ー、夫はどうも御氣の毒さまな、そして、一體、どの位お貸し申すので」

と聞きましたので、善右衛門は

「さよう、まづざつと千萬圓」

「えつ、千萬圓、大層なお金で、そして其質物には何を置いて下さる」

「さあ、質物つて別に何もありませんが……」

「いや、夫ならお断はり致しますせう。質物なしにお金を貸すことは、私の家の代々の禁物ですから、はい、其御相談は何れ又……」

善右衛門もこれには、大層弱りましたが、

「まあ、そう仰らないでおき、下さい、なる程質物といつては何もないが、其代り返す時に返さなかつたら貴下の望のものは、何でも上げる、たとへば私の生命でも」

生命といふのを聞いて、慾兵衛はひよいと考へ付

きました。いつも氣に食はぬこの善右衛門だ、これを幸に、一つひどい目に遭はせてやらうと思つて

「じや折角の御頼だから、宜しい引き受けました千萬圓お貸し申さう、其代り、約束の日がすぎたら、善右衛門さん、貴下の胸の所の肉の塊を一斤丈け頂きたいもので」善右衛門も、これをさいて、ぎよつとはしました、致し方がない、

「宜しい承知しました」

といふので、其處で期日になつて、其金を返さなかつた時には、善右衛門の胸の肉の塊を一斤燃助に渡すといふ約束の證文を書いて、夫を渡して、とうとう千萬圓丈け借りてきました。そして、其お金で、前にも劣らぬ見事な大船が出来ました。所が、善右衛門は、よくよく運の神に見離されたものと見えて、やつと其船が出来上つたと思ふと、其晩に大きな船火事が起つて、あれ程の立派なお船が、悉皆焼けてしまひました。

さすがの善右衛門も、これにはひどく弱りました。第一こつなつては、慾兵衛に金を返すことができな、い、そうなると胸の肉をとられねばならぬ、と思つていろ／＼工夫して見ましたがどうしても金の出来ようがありませんので、善右衛門の心配は、一通りや二通りでありませぬ。其中にとう／＼約束の日が過ぎてしまひました。で慾兵衛は、船の焼けたのも知つてゐますから善右衛門はとも、金が返せない、そつたといふと、いよ／＼彼の胸の肉を取つて平素の怨みをはらしてやらうと思つて、居ると、幸ひ約束の日がすぎても返さない、さわしめたと思つて、あるひのことよう切れ相な小刀を用意して、早速、善右衛門の所へやつて参りました。

「善右衛門さん御在宅か、さあ、今日は約束の日だから、お金を返して貰らひに参りましたよ」と門口から、怒鳴つて這入つて行きますと、善右衛門は

「や、これは慾兵衛さん、實はお返しに上らうと思つたのだが、とんだ災難のために、とうとうお金ができなくなつて……」

「あ、そうか、それじゃ仕方がない、お約束の通り、貴下の胸の肉を、一斤丈け貰らひましようよ」といつて、懐から小刀を取り出しますと、善右衛門は

「なる程、お約束だから仕方がありませんが、慾兵衛さん、私の胸の肉を一斤丈け取られることになる、私は死んでしまはねばなりません。さうなると、貴殿は、何時まで経つても、あの一千萬圓のお金を受け取ることができないじやありませんか、おまけに、私の肉だつて、貴殿に取つて、どれ程の代價にもなりませんまいし」

「いや、構はぬ、返して貰はなくつても構はぬ、お前さんの肉が、どれ程にならうとなるまいと、そんなことは放つておいて下さい、

「それじゃ仕方がない、が慾兵衛さん、物は相談

じや、この肉丈けは、どうか堪辯してくれませぬか、其代り、今少したつたら、屹度貴殿に損の行かない丈の御禮はするから」

「といろく頼んで見たが、慾兵衛、どうしても承知しません、何でも胸の肉を取らうといつてばつ切り取る用意にかゝつて居ました。

して居ますと、其處へ誠助がやつて参りました。難儀な所を一旦善右衛門に助けて貰つたが、近頃非常に大儲をしたといふので、前に借りた丈のお金を持つて、丁度今、返しに参つたのであります。そして来て見ると、慾兵衛の爲めに、善右衛門が、胸を切り割かれ様とする所だから、狼狽でこれ、其中へ這入つて、だんく譯を聞いて見て

「や、夫なら幸ひ、私は今善右衛門さんにお金を返しに來た所だから、一千萬圓は此中からお返しすればよい、そして其利子として、こゝにある丈けのお金を差上げ様、まだ足らぬといふなら、幾らでも私の家から持つてきて上げるから、どうか其

胸を切り割くの丈けは宥して下さらんか」

といつて見ましたが、慾兵衛、中々承知しません、「いや、期限が過ぎたら、胸の肉を取るといふ約束なんだ、金なら、其期限の時に返して貰らひたかつたんだ」といつて、いよく頑張る、どんなに謝罪つて見ても、承知しないから、誠助は、じつと考へてから、善右衛門に向つて「こりやどうも仕方がない、善右衛門さん、貴下もそんなお約束をしたのが悪いんだから、諦めて、肉を上げなさい」

といふと、善右衛門も

「承知しました、上げませう、誠助さん、夫じや後のことを頼みますよ」

と答へて、じつと目を閉じて仰向けになりますと、慾兵衛は、「さあ、どうだ、今から切り取るんだよ」

と言ひながら、善右衛門の上に馬乗りになつて、小刀の尖を、づぶつと突つ込まうとすると、誠助

は「や、慾兵衛さん、一寸待つた。

「え、うるさい、何の用だッ」

「他じやないが、約束した證文は持つておいでか」

「何、證文、そりや持つてる、そら此通りだッ」

と懐の中から、投げ出したのを、誠助はじつと讀んで見て、

「慾兵衛さん、お前さん秤を以ておいでか」

と問ふ

「秤つて何の爲に」

「そうさ、此の證文には、肉一斤とあるから善右衛門さんの肉をかけんければなるまい」

「なる程、そうだっけ、夫じや急いで取りにやらう」

「夫から、も一つ言つて置くが、確に一斤とあるからには、一斤より多くも少くも取ちやいけないよ宜しいか」

「うーん、そうさな……まあい、確に一斤丈

け切り取らう」

「そうか、じや序にも一つ言つて置くが、證文に

「そうか、じや序にも一つ言つて置くが、證文に

「そうか、じや序にも一つ言つて置くが、證文に

は肉一斤と丈あるんだから、善右衛門さんの血は一滴でも取ることはならんよ」

慾兵衛は、これを聞いて急にぐにやりとなつた

「うーん……誠助さん、肉を取ることは、

もう廢さう、其代り前に言つたお金の方を返して貰ひませうよ」

「いや、そりや行かん、前、私からあれ程、頼んだに、お前さんは肉の方かい、といつて、聞かなんだのじや、夫に自分の都合が悪くなつたといつて、そう勝手になるもんじやない、さあ、善右衛門さんの肉をお取りなさいよ」

「はあて、誠助さんも、眞實に強情な人じや、お金を返して貰つて、肉を取ることを己めれば、善右衛門さんも助かるし、私も……」

「いゝからさ、そんな事言はんで、早くひとりよかい取らんかい」

誠助の權幕は、だんぐ強くなるにつれて、慾助は、だんぐ小さくなつて仕舞つてとうぐお終

には、涙をこぼして謝罪ましますから、根が人のよい善右衛門ですから、黙つて見て居る譯には行きませぬ、怒つて居る誠助を宥めて、とうぐお金を返す事にしました、が、誠助は、何處までも慾兵衛の人の悪るいのを悪んで居ましたから、

「夫じや善右衛門さんもあゝ言ふから、此方の言ふ事をさげやお前さんの願も聞いてやらう、」と申しますと、慾兵衛は、もう絶對絶命なんですから、何でも聞きますといふ、そこで、誠助は、

「お前さんは、平素大慾張で、自分の親類でも、何んでも構はない、夫でこの一千萬圓の利子じやが、これは、お前さんの兄さんが、大層な貧乏で食ふに困つて居るから、其家へやるんだよ、いゝか、そして此一千萬圓、これの半分丈は、先日前さんの慾張りを諫めたといつて追ひ出してしまつた、息子の吉次郎さんに上げた上、すぐ吉次郎さん呼び返しなさい、そして残りの半分だ、これは、お前さんの爲に、大勢の人が随分可愛想

な貧乏になつてゐるから、其人等に大きな貨屋をたて、おやんなさい

と、一々指圖をせられた。慾兵衛は勿論、いやで

仕方がないけれども、夫を聞かねば、肉の正身一斤丈け取れといはれるし、しよう事なしに、夫

を承知する事になつて、とうとう其金を受け取つて、濟して貰ひましたとさ。

めでたし

### 編輯記事

從來弘道館でして居つた會費の徴收も、愈先月から本會直接に扱ふ様になつて幹事一同頗る多忙を極めたので、本年は誠に繁劇な新年を迎へましたが、幸に事務も整理して雑誌の發行も、定日には必ず發行する事の出来る様になつたのは、誠に悦ばしく存じます。

夫れに付けても驚きましたのは、會員諸君に會費未納者の多いことです、何卒是は一日も早く御納付下さる様に御願ひ申します。滞つた上に催促のはがきを出す様では、拾錢の會費は八錢にも七錢にもなつて、終には會が立行かなくなるかも知れません。未納會費の中、昨年四月より十二月迄の分は、書肆弘道館より催促が参りませう。

が御拂込は御便宜本會なり。弘道館なり何方へでも御送り下さい。弘道館の宿所は廣告欄にあります。

本號には短歌選集に差支があつて、切迄に間に合ひませんでした。から次號に並べて載せることに致しました。それから先々月分の短歌賞品は幹事非常に多忙の爲め發送が遅れて申譯がありませんでした。漸く手がすいたので、先月十日發送致しました。あんなに遅れる筈ではなかつたのですが、何せ年末に際して會計の引繼と云ふ面倒な事を遣つたので、何もかも遅れ勝になりました。何卒惡しからず御諒承下さい。尙本月よりは引續き懸賞で短歌とお伽話と一般の記事とを募集することにしましたから、續々御投稿下さい。詳しくは表紙の第三面を御覽下さい。

本號には精巧な紀念繪端書を添へて聊か本月の佳節に對して祝意を表しました。實は本誌七週年の紀念として前號に附けたかつたのです。が印刷其他の都合で止めにして、新に此二月號に於て十一日の佳節を祝した次第です。

夫れから會員諸君の御轉居は其都度速に御報知下さることを御志願ない様に願ひたく御座います。

雜誌が轉居先不明で毎月幾つも戻つて参りますから

